

論文内容の要旨

申請者 小林 千紘
KOBAYASHI, Chihiro

論文題目

福島原発事故による長期避難からの帰還後を生きる人々の日常
Daily Life of People after Returning from Long-term Evacuation due to the Fukushima Nuclear Accident.

I. 研究の動機と背景

2011年3月11日の大震災に続き発生した福島原発事故により、影響を受けた地域の住民は長期に亘る避難を余儀なくされた。住民の帰還が開始されても、総じて帰還の動きは鈍く帰還率は低い。福島原発事故によって人々が突如奪われ喪失したものはそれまでの日常に他ならず、帰還は決してゴールではなく、震災前の日常を取り戻すことは出来ない。その一方で、帰還した人々は、喪失と向き合う痛みを伴いながらも自身の力で新たな日常を生きていると推察されるが、帰還後の日常を帰還した人々がどのように受け止め、これからをどのように思い描いているかについては明らかにされていない。

II. 研究目的

本研究の目的は、帰還した人々が帰還後の日常をどのように捉えているのかを明らかにすることである。

III. 研究方法

Gadamer の示す解釈学を哲学的基盤とした質的記述的研究を研究デザインとした。研究フィールドは2017年に避難指示が一部解除となった福島県の一自治体内にある医院であり、研究参加者は、当該自治体に帰還し医院に通院する住民と、医院スタッフである。半構成的インタビューとインフォーマル・インタビュー、参与観察によるデータ収集を、2019年12月～2020年8月に実施した。得られたデータは、Gadamer の解釈学に基づき Fleming et al. が示した方法を参考にし、全体と部分の解釈学的循環を繰り返しながら分析した。本研究は日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認（第2019-077）を得て実施した。

IV. 結果

研究参加者は帰還住民が女性6名、男性1名の計7名、医院スタッフが女性5名の計12名であった。帰還住民の結果については研究参加者ごとに記述し、医院スタッフの結果については研究参加者個別の語りを医院スタッフとして統合した結果を記述した。本研究は日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認（第2019-077）を得て実施した。

帰還住民のデータ分析からは、「変わりゆく町のなかで変わらなさを貫く」、「培ってきた自分の力で第二の人生を歩む」、「新しくつながり直しつつ町を盛り上げる」、「妻と暮らした地でひとりこれからを模索する」、「新しいものを受け入れもう一度馴染む」、「亡き家族のそばで自分の人生を生きる」、「災害に遭った地であるこの町とともに生きてゆく」の7つのテーマが導出された。

医院スタッフのデータ分析からは、「受け継いできた地とつながり続ける」、「変化に慣れていく人とそうでない人がある」、「人が少なくなった町だからこそ大事にされる」、「変わらぬ結びつきと安心を感じに医院を訪れる」の4つのテーマが導出された。